



西照寺寺報「さいしょう」 第33号  
 2014年8月16日  
 発行 浄土真宗本願寺派 西照寺  
 高岡市吉久2丁目4-40  
 郵便振替口座 00780-8-8185 西照寺  
 西照寺ホームページ <http://nisitera.eek.jp>

# 祠堂永代経 勤修

左記のとおり今年度の祠堂永代経をお勤めいたします  
 お参りくださいませ

## 時間

八月二十五日(月) 午後二時 ～

二十六日(火) 午後二時 ～

布教使 高瀬 顕正 師 井波町浄教寺住職

## 西谷山 西照寺

この法要は、ご先祖を大切にしのぶ皆様の御懇志によって  
 営まれています。西照寺郵便口座などご利用頂ければ幸甚です。

しょうしんげ

## 正信偈のはなし 第九話

のうほついちねんきあいしん ふだんほんのうとくねはん  
 能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃  
 (よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱  
 を断ぜずして涅槃を得るなり)

ほんじょうぎやくほつさいえんげう によしげうすいにげうかいちみ  
 凡聖逆謗斉回入 如衆水入海一味  
 (凡聖・逆謗斉しく回入すれば、衆水  
 海に入りて一味なるがごとし)

ふたごころなく阿弥陀如来の本願  
 を信じよろこぶ心がおければ、煩惱を  
 断ちきらなймаま、浄土でさとりを得  
 ることができる。凡夫も聖者も、五逆  
 ほうぼう  
 謗法という極悪の者も、みな本願のお  
 心に帰すれば、川の水も海に入ると一  
 つの味になるように、等しく救われて  
 悟りをひらくことができる。

(中面に続く)

## 氷と水の同質性

大乘仏教では、迷いと悟りの関係が氷と水に譬えられてきました。

氷が迷いで私の世界、水が悟りで仏の世界をあわわわしています。この氷と水を「同質」と見るか、「異質」と見るかによって教えの受け止めがかわってきたように思います。

本来は、氷も水も分子レベルでは共に「H<sub>2</sub>O」で「同質」です。そういうことから、「煩惱即菩提」「生死即涅槃」とか、「仏凡一体」（仏と凡夫は本来一つである）などと言われてきました。

ですから、釈尊の悟りというのは、何か特別な能力を身につけるとか、スーパーマンになるとか、何か違った私になるということではないのです。私の命の全体の方に気づいた釈尊は、そのことを「縁起」ということばで言い表してくださいました。後に「一如」「真如」とか、龍樹菩薩は「空」ということばで表し直してくださいました。もともと私の命は「空」という在り方をしていのに、固定的な自分が存在すると執着し煩惱に縛られている。それが、私の苦悩の元凶で、心身ともにそこから解放されることが釈尊の目覚めた悟りということの基本的な内容ではないかと思えます。極端な言い方をすると、私をはじめから、悟りの中にいるのであって、私の煩惱がそれを見えな

くしている。そこから解放されると、私の「そのまま」「ありのまま」が涅槃ということになるわけです。

釈尊はつぎのようにお説きになりました。

「デーリーガーター」（長老尼偈経）というパーリ語經典に、ウツビリー尼の話が書かれています。概略私的な和訳でお話しますと、

王妃であった母ウツビリーは、幼い娘ジューヴァーを亡くしました。

その悲しみは深く、林で荼毘に付しながら、わが子の名をいつまでも泣き叫んでいます。それを見かねた親族が釈尊にたのみました。

訪れた釈尊は

「あなたは先ほどから、ジューヴァー、ジューヴァー、と泣いて泣いているが、どこのジューヴァーを泣いているのか。この火葬場では、八万四千人のジューヴァーという娘が焼かれた。そのどれのジューヴァーを悲しんでいるのか」と問いかけます。

その時、聡明であった彼女はハッと気が付くのです。

「お釈迦さま、あなたは、私の心に刺さって居る見難い矢を言い当て、抜いて下さいました。悲しみに打ちひしがれているわたしの為に、娘の死の悲しみを除いて下さいました」

「今や、わたしは矢を抜き取られて、悲嘆の無い者（無欲）となり、

円かな安らぎ（涅槃の境地）を得ました。どうかお釈迦さまのお弟子にしてください」

と言って、尼僧となって悟りをひらいていくという話です。

私という命は、あらゆるものが関係し繋がりがあいながら生滅変化し、いま仮に私として集まり成り立っているにすぎません。事実として、固定的に普遍的に存在している私などというものはどこにもありません。それが「空」ということなのでしょう。それは、皆が一つ（一如）であるような、親鸞さまの言葉を引用すれば、「一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり」という、繋がっている命の世界です。誰が亡くなっても、涙すべき関係性を生きていながら、何故近しい人の死にしか涙できないのか。

問題の本質は私の煩惱にあったのではないか。

優れた先生であった釈尊に導かれて、幾ばくかの弟子たちは、この世で自らの煩惱から解放されて悟りに到ったとされています。

これが仏教の基本的な原理です。



## 氷と水の異質性

ところが、釈尊滅後徐々に状況が変わってきたように思います。氷と水の「異質」の方が、大きくクローズアップされてきました。

私の煩惱と罪業は余りにも深く、仏の悟りとは決定的に隔絶されている。今や、釈尊という絶対的な先生もおられない。更に時代の推移と共にこの世で悟りを開くという環境も衰えていく。煩惱を滅すれば悟りに到るというのは、原理としてはそうかもしれないが、現実には全く不可能で、「絵に画いた餅」、観念にしか過ぎないのではないか。そんな状態の圧倒的多数の私たちが、煩惱の日暮らしを尽くしながらも、悟りに到る道などというものがあるのだろうか。

「いや、釈尊は自分がいなくなっても、全ての人が悟りに到ることができる道を必ず用意されていたはずだ」と、

その道として、釈尊滅後五百年頃から、大乘仏教と言われる仏教復興運動が盛り上がり、阿弥陀如来が登場するようになってきました。

それは、釈尊が何百回も生まれ変わり死に変わりして修行を重ね、この娑婆世界に生まれて悟りを開くことができたとして理解されるようになったように、私も先生と環境に恵まれた阿弥陀仏の浄土に生まれ変わり、必ず悟りに到ることができるという道です。

（裏面に続く）

(中面からの続き)

阿弥陀仏がそのような道を完成してくださった。

実は、私の方からは氷と水が「異質」であるように、仏とは全くかけ離れています。しかし、仏の側からは、氷と水が「同質」であるように、私と仏は一つであり、つねに仏のはたらきの中にいるのでした。ただそれに気付いていなかったということです。

気づかない私に、かたちとなって現れてくださったのが阿弥陀如来でした。その経緯を親鸞さまは、唯信鈔文意ゆいしんしょうもんいの中で

『法身ほっしんはいろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよびれず、ことばもたえたり。この一如いちにちよりかたちをあらはして、方便ほうべん法身ほっしんと申す御すがたをしめして、法蔵比丘ほっぞうびくとなりのたまひて不可思議の大誓願をおこしてあらはれたまふ御かたちをば』

と述べておられます。

「一如」という仏の悟りの世界から法蔵菩薩としてかたちをあらわし、すべてのものを浄土にすくいと悟りを開かせるといふ願いを建て、阿弥陀仏に成られた。そしてその願いとはたらきを南無阿弥陀仏込めて、あらゆる人々に届けられているのでした。

私に分かるように象徴的人格体として現れてくださった。「空」が阿弥陀仏となつてそのはたらきをあらわにしてくださいましたということ

しよう。

南無阿弥陀仏に込められたそのはたらきを疑いなく受け入れたころ(信心)に、私の煩惱の闇を知らされ、如来の願い(本願)のなかに私のねがうべき方向と世界を、悟りに到る確信を知らされるのでした。

凡夫である人間は死ぬまで煩惱はなくなりません。煩惱があるから苦しみ悩みが絶えることもありません。しかし、煩惱があるから苦しみ悩みむからこそ、如来の真実に出遇い目覚めるといふことができるのです。そこに煩惱がそのまま如来の心へと転ぜられ続けていく歩みと生活が開けてきます。

煩惱の闇から抜けることのできないあらゆる人々のために、これ以上のない阿弥陀如来という先生によつて、真実へと導かれていく道が用意されていたのでした。

その如来に出会った慶びを親鸞さまは、

『煩惱にまなこさへられて 摂取の光明みざれども』

大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり』(高僧和讃源信讃)

『無碍光の利益より 威徳広大の信をえて』

かならず煩惱のこほりとけ すなはち菩提のみづとなる』(高僧和讃源信讃)

とうたわれましました。

合掌

(文責 住職)